

「社会的に排除されている人々が地域に広範囲に出現しているにもかかわらず、彼ら(彼女ら)は『役に立たないもの』として放置されるか、行政サービスのたんなる受けてとしてしか見なされてこなかった現状に対して、その能力や知恵を活かし、自ら問題を解決しようとする主体(サービスの提供者)として位置づけられることで、すべての主体が地域の能動的なステークホルダーとなるという考え方」は、「コ・プロダクション(協同生産)」と呼ばれている。コ・プロダクション(協同生産)とは、「事業において、恩恵を受ける側も、それを与える側も同等であること」を前提に、「サービス受益者が、サービスの提供自体に参加し、関わるようにすること」、すなわち「支援を受ける人びとが協同労働者や協同生産者として関わるができるようにする原理である」と、福士正博氏(東京経済大学教授)はその著書「完全従事社会の可能性－仕事と福祉の新構想」(日本経済評論社、2009年)で述べている。

ここで述べられた「協同労働者」「協同生産者」が、さる11月9、10日に広島で開催した「第1回建物総合管理・コミュニティ施設全国よい仕事コンテスト」(労協連主催)にたくさん登場することになった。

「あらゆる人の成長・発達を可能とするワーカーズコープの清掃現場の可能性が示された。身体的・精神的に困難のある社会的ハンディを抱える人びと、たとえどんな

状態にある人たちでも、仕事のやり方を明確にさえすれば全ての人々が成長・発達することができることを示してくれたと思う。つまり、どんな困難にあらうとも、我々普通の市民が主体者となり、社会や地域を変えていくことができるのではないか。この人間の連帯の力を強め、地域や社会を変えていく力に変えていこう」。…コンテスト表彰時の労協連永戸理事長の言葉に、その内容が集約されている。この全国会議は、協同労働の協同組合(ワーカーズコープ)のこれまでの歴史を画する内容と新たな可能性を拓くものであったように思う。

現在、私たちワーカーズコープの清掃現場には、地域若者サポートステーションから紹介された就労困難やひきこもりの若者、生活保護を受給している人や元ホームレス、アルコール依存症、障害のある人たちが、仲間として共に働いている。全国コンテストに登場した13現場の仲間たちから「仕事をしていて楽しい」「仕事が評価されてうれしい」「先輩方の仕事に尊敬と誇りを感じる」等、仕事を通じて育まれた組合員や地域との関係が当事者から豊かに語られ、私たちワーカーズコープの歴史の基礎を築いてきた清掃現場は、人間の成長・発達を可能とする「社会連帯の協同組合」への段階に確実に向かっていることを実感させるものとなった。

今後私たちは、12月14、15日の「全国ケアワーカー集会」、1月11、12日の「子育て

フォーラム」などの分野別集会を経て、その締めくくりとして2月15、16日に「全国よい仕事研究交流集会」を開催する。2015年度の介護保険制度の改定、生活困窮者自立支援制度や子ども・子育て3法などの制度などを焦点に、「よい仕事」が私たちの仕事の枠の中、内なる「よい仕事」にとど

まらず、地域をより良くするための「よい仕事」として「市民化・社会化」させる段階へとどう向かうのか。「よい仕事」と「仕事おこし」を結んだ「よい仕事おこし」運動が、組合員や市民の成長・発達と結んでどう最高の水準を作り上げていくことができるのか、私たちに求められている。